

留学で学んだもの

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4637

留学で学んだもの

German educated me it.

金沢大学大学院医学系研究科がん局所制御学
(旧講座名：外科学第二)

三 輪 晃 一

ドイツに文部省の在外研究員として留学したのはもう15年前になる。わずか10ヶ月の滞在と短い、精一杯勉強しようと意気込んでミュンスター大学一般外科研究室に入ったのだが、その出鼻を挫くようなことが早々に起こった。就業時間は5時までとなっていたが、日本にいると同じように研究室で残業をしていたら、掃除の小母さんに早くアパートへ帰るように追い立てられた。外国からのまだ信用の置けぬ輩をひとり残すことに不安を感じてか、翌日ラボランチンにその理由を尋ねた。研究室の保安維持も理由のひとつではあったが、就業時間を守らせるのが、大きな理由と話してくれた。時間外労働を美德のように思っていた私には、意外な価値観の違いにショックを受けた。慣れるに従い、ドイツ人の時間に対する厳しさを随所で知ることが出来た。スーパーでは次に支払いを待つ客が並んでいても、終了時間になればにべもなく断ったり、土曜の午後から日曜日一杯は、駅周囲のコンビニ以外はすべて閉店なることなどであった。この不便には大いに面食らったが、郷に入れば郷に従えで慣れるのを待ったが、時間を要した。

こんなてんばの遅い、あまり働かない生活の中から、どうしてノーベル賞者を世界一多く輩出できるのかが、疑問となった。どこかに猛烈人間がいるはずだ。少なくとも学生は勉強しているはずと、研究室に出入りする学生をみたが、簡単には見つけることは出来なかった。

当時アメリカでは、癌の遺伝子研究が始まっており、日本でも期待をもってこれに研究のスタンスを移す外科研究者が多かった。ドイツではどうかと主任であるビュンテ教授に尋ねたら

「あの研究は金がかかる。アメリカに任せて置けばよい。」とその気が全くない様子であった。

わたしは、期間の短いドイツ滞在中で一向に始めてくれない研究にいらいらし、上医であるラングハンスに胸の内を話した。彼がいうには、「ドイツでは、動物愛護団体の監視が厳しく、新しい研究の許可はなかなか下りないのだ。日本は、胃癌に関しては世界をリードしているのではないか。われわれは何にも教えることがない。わずか10ヶ月の滞在でないか。胃癌以外にも勉強することはあるから、漫遊するのもよいではないか。」といった。これを聞いた時、私は詐欺にあったような気がして、顔にもきつと不満が出ていたと思われる。それからは、研究ではなく、見聞に徹することを第一義に変え、手術や学会だけでなく、美術館や音楽会、お祭りなどを中心にあちこちを回ることにした。今振り返ると、この見聞により感性が身につき、知己が得られ、充実した留学になったように思える。ラングハンスの「気忙しい日本人」への適切な助言に感謝している。

開国以来140年余り、日本は外国に追いつけ追い越せで睡眠時間も十分に取らずに、連二無二頑張り、経済大国の仲間入りするまでになった。先頭に立ち先導がいなくなったこれからは、どこへ向かって進むかは自力で考えなくてはならない。外国研究の二番煎じへの労力を省き、量ではなく質を高める必要があらう。それには、溢れる情報を取捨選択し、如何に不要なものを見分け、切り捨て、時間を有効に使うかが重要である。そして、ものをゆっくり考える時間を作り出すことも必要ではなからうか。